

[5]

氏名	宗村 敦子
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	経博第15号
学位授与の日付	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	南アフリカの労働集約型工業化 —1930年代西ケープの缶詰産業における労働共有型 地域経済の形成
論文審査委員	主査教授 北川 勝彦 副査教授 檜原 正澄 副査教授 西村 雄志

論文内容の要旨

1990年代中葉の民主化、すなわちアパルトヘイト（人種隔離）体制の廃絶以後、着実な経済成長を示してきた南アフリカ共和国（旧南アフリカ連邦）の歴史と現状に関する国内外での研究は、近年数多く現れるようになった。しかし、南アフリカ経済には依然として大量の失業と階層間の著しい格差が存在し、この現状を打開するために土地制度改革による疲弊した農村の再建と雇用創出効果の大きい労働集約的産業の構築が重要な政策課題として認識されている。

以上の背景の下で、本研究は、南アフリカ経済史上、1930年代に成立した労働集約的産業を取り上げ、その成立に必要な諸要因の中でもっとも重要とされる要因としての労働に注目しつつ、その供給源、調達過程、および産業内の配置について検討することによって、近年台頭しつつあるグローバル経済史研究における労働集約的工業化の事例研究に新たな知見を加え、さらには工業化過程の理解の枠組みを広げようとするところにその目的がある。1930年代の南アフリカでは、第一次世界大戦中に生じたヨーロッパからの輸入工業製品の途絶を契機として輸入代替化過程が開始されるが、その過程で出現した労働集約的産業の中には雑貨品、綿製品、加工食品などの産業が見られた。本研究では、南アフリカの南西部に広がる西ケープ地域特有の植生帯を背景に成立した果樹栽培とそれに関連して誕生した第一次加工業としての果物缶詰産業における労働集約的工業化過程において不可欠とされた一定のスキルを備える労働者の供給源、調達過程および作業工程における労働力の配置に焦点をあてて究明することで、南アフリカにおける工業化過程、さらには労働集約的工業化の成立条件についてこれまでの理解に新たな知見を提示することを課題としている。

以上の課題を考察するにあたって、本論文では、以下のような順序で検討が行われた。序章では、労働集約型工業化過程においては「安価で豊富な労働力」の供給をどのように

確保するかという課題を考察するうえで、W.A. ルイス以降展開されてきた発展途上国における「二重経済」の存在と農村からの無制限の労働供給モデルに依拠した議論が広くはアフリカ、具体的には南アフリカの工業化過程の理解にはたして妥当するかどうかを考察している。1930年代の南アフリカの工業化期において、政府のイニシャティブの下で建設された鉱業エネルギー部門で必要とされる安価な不熟練労働者は、農村に隔離された原住民指定地から供給されたが、第一次世界大戦後、流入の途絶したヨーロッパ品の輸入代替化政策の下で立ち現れてきた雑貨品、綿製品、あるいは海産物ないし農産物加工品のような労働集約的な製造業の成立過程ではいかなる労働力供給源からどのように労働者が調達され、また、製造工程のどのような部門に配置されたかについては、これまでの南アフリカ経済史研究では十分に明らかにされてこなかった。この時期には、これまでの鉱業部門と農業部門への労働力の配分に加えて、製造業部門へ労働力をどのように配分するか、という政策課題が登場し、しかも農村では都市部への人口流出の結果、「労働力不足」という事態が発生していたのである。したがって、本研究では、以上のような南アフリカ経済史上の背景において、この時期に西ケープ特有の植生帯の存在を背景に台頭してきた第一次加工業としての果物缶詰産業を労働集約型工業化の事例として取り上げ、当該産業と緊密な関係にあった果物栽培農場の経営についても考察を加えながら、必要とされた低賃金の不熟練ないし半熟練の労働者にはいかなる供給源が存在し、どのように労働者が効率的に調達され、また、果物缶詰製造過程ではどのように配置されたのかについて考察することで提示された課題に答えようとしている。

第1章では、世界恐慌を発端として窮状に陥った南アフリカの農場主の救済のために1930年代に行われた農業金融の再編過程を論じるとともに、西ケープで次第に現れてきた果物栽培農場主の経営について論じている。この新たな農業金融の枠組で利用される事業資金は、地域間の利害状況や農業組合への加入状況などの諸条件に基づいて選択的に融資されたために農場主の農地改良や灌漑施設の新設と補修などの事業に影響を及ぼした。農業技術の改良に重点をおいた農場主への優遇策の展開で評価をうけたスマッツ政権は、農地の灌漑施設の拡充などで公共事業を拡充していったが、それでも西ケープの中小規模の果物農場主たちの事業資金の需要を充足することはできなかった。すなわち、短期の融資に重点をおいて新たに設立された **Land Bank** では農場主の資金需要に応じきれず、長期の投資を伴う農地改良や灌漑施設の拡充に対する農場主の自己負担は大きくなっていった。しかも、1930年代には農地改良によって果物の生産量は増加していたものの、世界恐慌後には農産物の市場価格の低迷と生産コストの上昇という難問が生じていたのである。

第2章では、1930年代の都市化に伴って南アフリカ各地の農場で生じた労働力不足問題とそれに対する政府の対応を検討した。南アフリカの西ケープのインド洋沿岸部とその内陸部の農場では、農作業に必要な労働者を確保するために一定の耕作地ないし放牧地の貸与と引き換えに無償で労働の提供を受ける方法がとられてきた。しかし、都市部での製造業における賃金労働の機会の拡大と労働小作の行われてきた地域においても白人の所有する大規模農場では賃金で雇用される労働者が次第に顕在化してきたために、都市部の製造業と農村の間、農村の農場主間で労働者の獲得競争が顕著となった。とくに農村の小規模農場は、労働者を確保するうえで著しく不利な立場にたたされることになった。このような状況に対して南アフリカ政府の関係省庁間および原住民問題省内部においては、新たな

低賃金労働として外国人労働者を導入すること、また各農場での雇用期間に制限を加えることで農場間の労働需要に応じて労働者の供給を調整することで問題の打開策が講じられた。後者の趣旨に沿って設立された労働小作監督局は、十分な現金賃金を支払えず労働者を確保できない小規模農場のために原住民問題省が調整機関となって設立された各村落を対象とする雇用調整部局であった。本章では、農場労働への賃金雇用の浸透と労働者の雇用調整をはかる監督局制度設立の背景およびその機能について検討した。

1930年代の南アフリカにおいては鉱業および農業に加えて都市での製造業が台頭し、政府は各産業部門において「安価で豊かな労働力」をどのように配分することで部門間の労働需要に対応するか苦慮していた。南アフリカ経済においていわゆる「労働者不足」が生じる中で、第2章で論じたような調整機関の設立が対応策として講じられるのであるが、これに至るさまざまな議論のなかで、この問題が例外的に生じなかったと報告された西ケープにおける労働集約的産業の成立と果物農場の経営の間に労働者の確保をめぐるといったどのような事態が生じていたのか、について明らかにしようというのが、第3章以下の課題である。第3章では、1930年代の西ケープにおける労働集約的産業の成立過程を明らかにするが、その場合、当該地域における果物栽培農場経営の展開と密接に関連して成立した果物缶詰産業を事例としてとりあげ、同産業が熟練労働者に対比して非熟練労働者がきわめて多い労働集約的産業であり、この製造過程には西ケープのカラード女性とアフリカ人男性が数多く配置されていたことを明らかにした。とりわけ果物缶詰製造にかかわる工場では、果物農場の位置する農村にも都市における賃金雇用の機会が浸透しつつあり、労働者の確保をめぐる農場と都市製造業の間および農場間での競争が展開されている時期に、果物栽培農場から女性労働者を季節労働者として経年的に雇用し、作業に必要なスキル形成の機会を彼女らに与えつつ、低賃金労働者を安定的に確保しようとした取り組みを明らかにした。

果物栽培農場の経営においても果物缶詰工場の経営においても低賃金の安定した労働力の確保は必須の条件であった。第4章では、農場での作業から工場での労働に移動するうえで労働者にはどのようなインセンティブが働いていたのか、を検討した。それを明らかにするために、1930年代の西ケープにおける農場労働の賃金水準およびその支払い形態を分析し、それと対比しつつ缶詰工場における各工程別の賃金水準について比較検討した。その上で、賃金報酬の男女別および職階別の差異に注目しつつ、工場労働への移動をもたらす具体的な賃金インセンティブの存在を提示している。

第5章では、労働者の農村間移動がこの地域特有の雇用制度によるものであり、果物缶詰産業のような労働集約的産業に見られた女性労働への傾斜は、果物栽培農場との間で成立した季節労働の西ケープ地域における共有関係に支えられていたことを明らかにした。西ケープの各農場では、男性労働者は農場外の供給源から調達され、彼らは農繁期の終了とともに移動する労働者であった。果物缶詰産業では、中核作業をはじめとした諸作業には季節労働者として農場の徒弟家族を賃金で雇用していた。果物栽培農場の経営者は、農場徒弟の家族を住み込ませ農作業に従事させていたが、果物缶詰工場が現れると労働供給源として新築のタウンシップに注目するようになった。やがてこのタウンシップは、農場と工場の両方の労働力供給源として利用されるようになった。果物栽培農場主と果物缶詰工場主の間で労働者を安定的に雇用できるように、またスキルアップの機会を確保できる

ように、しかも賃金上昇の機会となる反復的な農村間の労働移動を持続できる枠組みが西ケープ地域経済の形成を通して創り出されてきたことを第5章では、明らかにした。ここに南アフリカの南西部に位置する西ケープにおける労働集約的産業の成立条件として労働共有型地域経済の形成がみられるのというのである。

論文審査結果の要旨

本研究の動機は、南アフリカ経済の歴史的展開の中で、重大な転機とされる第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に位置する時期をとりあげ、この第二次工業化期に成立した労働集約的産業の事例として西ケープの果物栽培農場の経営と緊密に関連しつつ成立した果物缶詰産業にみられた労働力獲得策に地域経済の形成原理を見出しつつ、労働集約的工業化の成立条件として地域経済の形成という新たな知見を加えた。この研究動機は明快であり、高く評価される。

本研究は、ポスト冷戦、ポストアパルトヘイト期において展開されているグローバル・エコノミック・ヒストリーで主張されている労働集約型工業化論においてほとんど論じられることがなかったアフリカ経済史、そのなかでもっとも重要な役割を演じてきた南アフリカ経済史の理解に新たな知見を付加したことで、その意義は大きい。

また、本論文では、先に設定した対象と課題を究明するにあたり、これまでの南アフリカ経済史研究ではその説明の枠組みとして鉱物エネルギー関連企業の歴史が中心であったが、これに加えて、近年の労働集約型工業化論の批判的検討を踏まえて労働集約的産業史研究の意義を示した点でも評価できる。

さらに、本研究の具体的な実証事例として取り上げられた西ケープにおける経済活動の歴史的展開と当該地域で成立した果物缶詰産業の形成過程を明らかにするにあたって、必要とされる史料としては、以下のものが利用されている。プレトリアの国立文書館に収蔵されている南アフリカ連邦政府の各省庁の公文書、各高等教育機関に保管されている各種調査報告書、西ケープの各都市に保管されている公文書、商業会議所文書館に保管されている特別史料、19世紀中葉から南アフリカで営業を開始したスタンダード銀行文書館の南アフリカの各支店関係文書などである。これまで南アフリカ在住の歴史家によって十分には活用されてこなかった一級の史料を調査収集して活用している点は、高く評価される。加えて、西ケープにおいて現在も営業を続けている果物缶詰企業における各部門の責任者に対して幅広い聞き取り調査を実施し、丹念なフィールドワークに基づく資料も活用されている点は、今後の日本における南アフリカ経済史研究に新機軸を拓くものであり、今後の研究にとっても示唆するところが大きい。

以上、本論文の研究にかかる動機、対象の設定、説明枠組みの構築、史料と実証の方法を検討する限り、博士の学位を得て、将来、専門分野の研究において自立した研究活動を行うについてその能力と基礎的な学識を有するものと判断する。

したがって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。